

聖書:ルカの福音書11章1～13節

説教:良いものを与えてくださる神

はじめに

先ほど共に祈った「主の祈り」のなかに、「御国が来ますように」というところがあります。ニュースでも報じられているように、ロシアがウクライナに軍事侵攻し、犠牲者が出ているとのニュースを聞くとき、あらためてこのことを祈らされていきます。しかし一方でこんなことを言う人たちもいるでしょう。「祈ったところで何が変わるのか、そんなことで世界が平和になるはずはない。」主イエスは、なにも意味がないことを教えたのでしょうか。あるいは、不安なときにこれを唱えれば心が落ち着く、そのような気休めとして教えたのでしょうか。そんなはずはありません。今日は、主が教えてくださった祈りとほどのような意味があったのか見ていきます。

1 祈り

1) イエスの祈り

事の発端は、弟子の一人がイエスに祈りを教えてくださいと願ったところからはじまります。祈り方を知らなかったということではありません。ユダヤ人であれば、小さな時から祈ることは教えられています。おそらく、イエスの祈り方が自分たちの知っているものとはまったく違うことに驚き、それで教えてもらいたいと願ったのだらうと思われる。では、それまで他の人たちはどんな祈りをしていたのか。二つの例を挙げます。

2) 律法学者の祈り

一つ目は、マルコ12章40節に書かれている律法学者たちの祈りです。「律法学者たちに気をつけなさい。彼らが願うのは、長い衣を着て歩き回ること、広場であいさつされること、会堂で上席に、宴会で上座に座ることです。また、やもめたちの家を食い尽くし、見栄を張って長く祈ります。こういう人たちは、より厳しい罰を受けます。」

いかにも聖職者ですというような目立つ服を着て、大ぜいの人の前に立って言葉遣いも巧みに格調高い声音で長々と祈る。律法学者が祈るのを見て、人々はこれが祈りの模範だと思っていたわけですが、イエスは明確にこれを否定します。

3) 異邦人の祈り

二つ目は、マタイ6章7節に出てきます。「また、祈るとき、異邦人のように、同じことばをただ繰り返してはいけません。彼らは、ことば数が多いことで聞かれると思っているのです。」

世間ではよく知られているある宗教のホームページに、「祈りは目的を成就するためのエンジン」だから、熱心になって何度も念仏を唱えるべきであると書かれていました。熱心さということでは素晴らしいかもしれませんが。でもイエスは、自分の願いを実現させようとする祈りを異邦人の祈りとしてこれも否定しました。

2 たとえ

1) 真夜中にパンを求め続ける人

では私たちはどう祈るべきなのか。イエスは一つの例を挙げて説明します。5, 6節。「あなたがたのうちのだれかに友だちがいて、その人のところに真夜中に行き、次のように言ったとします。『友よ、パンを三つ貸してくれないか。友人が旅の途中、私のところに来たのだが、出してやるものがないのだ。』」

聖書の時代、一晩泊めていただきたいという旅人がいるならお互いに助け合うのが当たり前、そういう文化があったそうです。しかしこの時あいにく、家にはパンがなかった。それで夜中ではあったけれど、パンを貸してもらうために友だちの所に行ったら、ところが断られてしまいます。ここまではいかにもありそうな話です。しかし、これには続きがある。8節後半。「しかし、友だちのしつこさのゆえなら起き上がり、必要なものを何でもあげるでしょう。」

これを読んでちょっと戸惑いませんか。友だちだからとか、そんなことをあてにしてもパンは手に入らない。その代わりに、しつこく何度も訴え続けたら根負けして、その友だちは必要なものを何でもあげるだろう。大事なものはしつこく何度も訴えること。それで有名なフレーズが出てくる。「求めなさい。そうすれば与えられます。」でもこれはさきほどのある仏教系の宗教と同じではないか。

2) 悪い者であっても

そのことはまた後で触れることにします。その前に、では求める者には何が与えられるのか、そのことを見ておきます。11,12節。「あなたがたの中で、子どもが魚を求めているのに、魚の代わり

に蛇を与えるような父親がいるでしょうか。卵を求めているのに、サソリを与えるような父親がいるでしょうか。」

どんなに悪い父親であっても子どもに良いものを与えたいと願う。言われてみればその通りです。神の目から見ると私たちは罪人、すなわち悪い人間ですが、それでも子どもが健やかに成長できるよう、最大限のことをしたいと思っています。

3) 天の父は良いものを与える

人間でさえそうなのですから、まして天の父なる神はもっと良いものを与えてくださる。それを聞いて期待するわけです。いったいなんだろうか。13節後半。「それならなおのこと、天の父はご自分に求める者たちに聖霊を与えてくださいます。」

意外なことに、と言っていいと思いますが、天の父なる神が与えてくださるのは「聖霊」だということです。ちょっと期待外れと思う方もいるかもしれない。

前にもお話したことがあります。毎週ハナさんという方からお電話をいただきます。ハナさんは、「私は本当に聖霊をいただいているのでしょうか」と、電話口でいかにも悲しそうな声で尋ねるのです。私たちも聖霊をいただいているという実感は乏しい。そのことおをあまり深刻には考えないところもある。ですから、聖霊が最も良いものなのだとと言われてもピンとこない。どうして聖霊がそれほど大切なのか。

3 聖霊を与えるために

1) ペテロが語ったこと

ここまで、いくつか疑問が出てきました。整理しておきます。二つあります。一つ目。イエスはしつこく祈りなさいと語ったけれど、それは異邦人の祈りとどこが違うのか。二つ目。祈ることと、聖霊をいただくことどうつながるのか。どうして聖霊が私たちにとって最も大切なことなのか。

そのことを知るためには、初代教会が初めて聖霊をいただいたペンテコステと呼ばれる日にペテロが人々に語ったことばが手がかりになります。その日、人々が一つところで祈っていたら天から突然、激しい風が吹くような響きが起り、部屋の中にいた人たちが聖霊に満たされていろいろな言語で語り始めます。大きな物音を聞いてやって来た人々はこれを見て驚き怪しみ、朝から酒でも飲んで酔っているのかと言い始める。それでペテロが人々にいろいろ説明したあとで、結論のようにこう語るのです。使徒の働き2章38節。「それぞれ罪

を赦していただくために、悔い改めて、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。」

ペテロは二つのことを語っています。一つ目。罪を赦していただくために、悔い改めてバプテスマを受けること。二つ目。その結果、賜物として聖霊を受ける。

イエスは、友だちが夜中にパンを貸してくれるようにしつこく頼むように、祈り続けなさいと語りました。問題なのは何を祈るかです。突き詰めれば、私たちにもっとも大切なこととは何かということになる。希望の学校に合格するように。仕事がかまくいくように。もちろん私たちはそのように祈ることができる。でも最も大切な祈りというものがある。それは主の祈りにあるように、「私たちの罪をお赦してください」と祈ることではないのか。どうしてでしょう。もし罪が赦されなかったならどうなるかを考えてみる。仮に祈ったら、希望していた大学に合格し、仕事もうまくいったとしましょう。そうやって人がうらやむような幸せを手にすることができるかもしれない。しかしいつか地上のいのちが終わるときが必ず来ます。その時もし、罪が赦されていなかったならどうなるか。その人は滅ぼされると言われています。そこにはなんの希望もない。ということは、今は楽しそうに見えていても、実は絶望というゴールに向かって走っていることになる。これは本当に恐ろしいことではないですか。

でももしその反対に、いま罪の赦しをいただいていたならどうなるか。地上では貧しい生き方しかできなかったとしても、ゴールには希望がある。たとえ死の床にあつてすべてを終える日が来たとしても、なにも絶望することはない。永遠のいのちをいただいて、神の国に迎えられるという約束があるからです。

今約束があると言いました。この約束を本当にいただいているのか。不安に思うのでしょうか。契約書があるわけではありません。目に見えるものとしては何もない。もしかしてキリスト教は大変なありもしないことを語る嘘つきなのか。そんなはずはない。目には見えませんが保証があります。なにか。エペソ1章14節。「聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証です。」私たちが聖霊をいただいていること、それが私たちが救われていることの保証なのだというのです。だから天の父は最も良いものとして聖霊を与えようとしている。

2) 天に上げられる日に

これを聞いてもあまり驚かないかもしれない。しかし、その聖霊がどのようにして与えられたのかを考えていただきたい。悔い改めたものがバプテスマを受けると、自動的に天から聖霊が降ってくる。そう思うでしょうか。決して自動的に降るものではありません。イエスが何をしてくださったのかを振り返ります。

同じルカの福音書24章49節を読みます。死からよみがえられたイエスは、弟子たちにこう語る。「見よ。わたしは、わたしの父が約束されたものをあなたがたに送ります。あなたがたは、いと高き所から力を着せられるまでは、都にとどまっていなさい。」そう語ってから、主は天に上げられていきます。

おわかりでしょうか。私たちに聖霊を与えるために、この方が通らなければならない道があった。まず、罪の身代わりとなって十字架で死ななければならず、三日目によみがえられて天に上げられなければならなかった。天に上げられて、そこで初めて父なる方に聖霊を降して下さるように願った。そうやって初めて私たちに聖霊が与えられた。主のいのちがかかっていた。神の子が十字架でいのちを捨てて与えようとしたものだった。天の父なる神が私たちに最も良いものを与えるために、そこまでして下さっていた。救いをいただき聖霊をいただくことが、どれほど幸せなことなのか。もう一度思い起こしたいと願います。